

平成二十八年十月号 自発行 第二十六卷第十号 通巻第三〇四号 (毎月一回) 自発行  
平成二十八年十月十八日第三種郵便物認可

# 槐 かい

平成28年10月号

岡井省二創刊



# 蚊帳

高橋将夫

夏燕逃がさぬ動体視力かな  
人の子の未来亀の子よりたしか  
胡蝶蘭蝶の遺伝子きつと持つ  
蚊帳くぐる妻が女にみえしころ

斑猫もときに恋路に迷ふなり  
将来を囑望されてゐる目高  
箱眼鏡まづ足もとを確かむる  
自らを中心に据ゑ水を打つ  
朝まだき風鈴の音の夢うつつ  
サイレンに暑さふくらむ正午かな  
浪曲は森の石松蚊帳の夜

『俳壇』八月号より三句

# 槐安集

水野恒彦

人去つて後の十月桜かな  
蓑虫の枝にふうはり妣ふうはり  
黄落の奥も黄落神の域  
山中の夜の晴れわたる秋渴き  
天の川獣の匂ひひろがり来

加藤みき

芋虫の円を描きて抗へり  
秋団扇われに馴染みの風をくれ  
お中元蟹歩きして通りたる  
月光に真白き団子ちやつちやつちや  
吾亦紅大津皇子に捧げたる

中島陽華

揚巻や宵山の鉾追ひかけて  
これやこのメビウスの帯夏祓  
おほかたは吉日の旅花あんず  
分け入りし賀茂の大岩滴れり  
はらからやまことまことに喜雨到来

竹内悦子

若冲の鶏犇めくやはたた神  
その辺に丸めてありし鱧の皮  
百日紅白猿の湯に浸りをり  
四柱推命わたしの腕に蚊が止まる  
掛軸に大きい白象蕎麦の花



雨村敏子

良寛てふ涼しき御名や杉木立  
ひいふうみい良寛さまとぶんぶんと  
蟬時雨車返しの道に入る  
車座のわつと崩るる大夕立  
晩節を涼しく住まふ膝頭

本多俊子

夜の宮形代の火に胸照らす  
虹消えてなほ掌に炎ゆるもの  
吉祥天山葵の花の白つどふ  
八月やひた歩きある長い道  
ほほゑみに哀しみ透けて雁渡し

近藤喜子

熱帯魚ひらりと風の立ちにけり  
琥珀のなか恐竜の血を吸ひたる蚊  
海たりし頃の貝殻晩夏光  
わたつみの押し広げぬる夕焼かな  
夜鷹の声とどく宇宙の闇の底

瀬川公馨

肉食むやウツボカズラのうとうとす  
裏山の番人らしき桐の花  
あをたうの米原万里の遺稿かな  
チェンバリストの天地茄子色に染め上ぐ  
元素記号のイチイチニホニウム

久保東海司

熊川暁子

一陣の風が蜂起の杉花粉  
千の嘘を一つ日傘の中に聴く  
鬼の子や蓑を着替へる事もなし  
瀬の音の中聴きすます河鹿笛  
風鈴の疎ましき夜のありにけり

炎天や行くといふのに来るといふ  
普陀落の風を盗みて三尺寝  
鶉篝や大きかりける美濃の国  
ほうたるに腥き風吹きにけり  
行く雲にたやすく乗りて水すまし

柳川 晋

寺田すず江

ウツシッシ土用の丑の目に泪  
悼大橋巨泉  
初蟬や夢の真中へ選挙カー  
国政が認めなくとも梅雨明くる  
裂帛の気合をこめてアロハシャツ  
何が出てくるやら怖き瀬干しかな

大歓喜生きて槐の花ざかり  
花ダチュラまた夜が来て朝が来て  
身の丈に羽化始めたり巴里祭  
底紅の乙女ごころを失なはず  
いつまでも反抗期なり生身魂

岩下芳子

ビル毀つ重機西瓜を切るやうに  
リビングを丸く掃きたる暑さかな  
一歳のらんちゆうぷりぷり泳ぎけり  
蜘蛛の囲や一番星の引つ掛り  
熱帯魚に餌やる日課外科医の手

近藤紀子

明易や夢の前半忘れ果つ  
曇り日や早苗の束の湿りをる  
をることが罪とばかりに百足虫打つ  
万葉の七夕の歌小竹に結ぶ  
眠らんと螢は梢目指しをり

岩月優美子

満開の百合の何処かに翳りあり  
ためらひと惑ひ消さるる滝の前  
晩節の脳波乱るる暑さかな  
海を出て自負の滴る海女なりし  
縋り付く空蟬に魂残りしか

竹中一花

涼やかな笑顔を隠す仮面かな  
茴香の花や摂津のうすぐもり  
車夫の汗舞妓の汗や二年坂  
幼児に余慶賜はる晩夏かな  
かなぶんの音止まりたる佛の手

前田美恵子

漁火の沖に出揃ふ夏はじめ  
選 択 は 地 獄 天 国 夏 薊  
あれあれと上七軒を過ぐゆだち  
覚めてなほ震へ止らぬ夏の夢  
一言を選ぶ沈黙黄金虫

中田禎子

銀漢やロケットひとつ上りたる  
木下闇五感鋭くなりける  
ロボットの介護も近し明石蛸  
蓮の葉のゆれて地獄の見えにけり  
大日と聴く若竹のそよぎかな



# 槐市集

有松洋子

われは何者炎暑の海にただ浮かぶ  
夏闇に広ぐ髪先湿り帯ぶ  
油照縁切寺の段高し  
荒神あらかみや天突き破る雲の峰  
雲の峰光を固め高さ増す

犬塚芳子

黄菅咲く雨の一日となりにけり  
絮散つたたたんぽぽ大事持つわらべ  
こんな日のひとりの昼餉冷奴  
さくらんぼ好きも嫌いもあるものか  
それとなくさつと落ちくる夏落葉

犬塚李里子

浦島草月に向かひて竿伸ばす  
名越の輪優しき嘘を許されよ  
ガラス戸に我が身打ち突く残る蜂  
居待月ユダのこころを思ひをり  
松虫や川のまぼろし音のみぞ

井上静子

高層の大窓に見る大船鉾  
子らの居ぬジャングルジムを蟻のぼる  
滑莧の生命力にシヤツポ脱ぐ  
席取りは丸太のベンチ運動会  
皓齒の子爪を土にし薯を掘る



今井充子

風を請ふ団扇片手にねむりたる  
端麗のアガパンサスや涼新た  
よるめきて母鹿に添ふ生れし鹿  
普段着のサンダル履きと夏帽子  
豆御飯ラップに包みにぎりたる

岩田洋子

洋子さんと声かけられる百合の花  
白南風や昆虫図鑑見てをりぬ  
三伏や法螺の音色の裏返る  
夏雲雀浜風の音見失ふ  
松葉杖つく少年の晩夏かな

江島照美

美しきレースの日傘おねえ様  
梅雨寒し修正利かぬ傷残る  
飯零し知らん顔して生身魂  
一線を越ゆる恐さや原爆忌  
こだはりもつるりと滑り水羊羹

岡田桃子

青芦のウエーブがんばれ一寸法師  
行々子浮棧橋のギイと鳴く  
青葡萄十五の不安いとほしく  
家族一人預け炎天帰りけり  
ポケモンを出しに追い出す夏休み

荻布貢

黒猫の尾立て伸びする小暑かな  
スコッチの甘き苦味や半夏生  
白南風やバイクの音の遠ざかる  
自転車のマナー違反や半ズボン  
愛嬌の三段腹や水着の子

久保夢女

麴に噎せて唯今五里霧中  
ケセラセラ斯く心得て三尺寝  
天道説それ安心と日日草  
夏芝やこけても瞳きらきらと  
棘の無いバラを咲かせてふと思案

# 槐集

## 高橋将夫選

糸蜻蛉こんな静かな生もある  
大阪 有松 洋子

わが秘密手を這ふ蟻が嗅ぎつける  
星屑を混ぜてつくらん花氷  
思ひきり泣いて涼しくなりにけり  
肉桂水赤青黄みな嘘つぱち  
すててこや消えぬ訛のいとほしく

江島 照美

寝かされて育つ醤油は氷室内  
蟬時雨思ひ出を売るフリマかな  
浮世絵は今グラビアよ月下美人  
奥山のみどりは人を寄せつげず  
夏越の輪くぐりてゆらり宙へ出づ

岡崎 犬塚李里子

わが十字架背負いて行くやこの炎暑  
風と来て次の世に去る火焚鳥  
言霊の浮遊してをり芒原  
末枯の野より変身のカフカ来る

まぶしさは風のみならず今年竹  
岡崎 吉田 順子

凌霄花雲をとらえて宙に咲く  
菩提樹の花に寄り来る羽音かな  
白桃をすすり生命線ぬらす  
わが余生急ぐな急かすな秋の蟬  
日輪の芯もつ蓮の花開く

枚方 橋本 順子

兜虫もんどりうつて負けにけり  
日を返す馬の肉叢大夏野  
燃えつきしもの落ちにけり蓬野へ  
打水の終はりは明日へ撒きにけり  
夢追へば虹の橋見ゆ夕明り

岡崎 柴田 靖子

生くるとはかくあるものと蟬時雨  
波頭の語りくるもの初浴衣  
羅や斯くて心も風にのせ  
青草や命あふるる繁りかな

# ◆ 槐集観照

## 銀河往来 高橋将夫

糸蜻蛉 こんな静かな生もある 有松 洋子

動植物は進化の歴史の中で実にさまざまな生の形態を獲得した。また人間にしても、まことにさまざまな生き方がある。掲句はそんな理屈の世界を越えて読者の胸を打つ。「こんな静かな生」のたった九文字が心に響く。糸蜻蛉をか弱いとは詠めても、なかなかこうは詠めない。

〈思ひ切り泣いて涼しくなりにけり〉の句、「泣いて気持が軽くなった」なら普通だが、「涼しくなった」とはなかなか詠めない。さらりと詠まれているが、本当にそう感じたからこそ自然に湧いた一句だと思う。

〈わが秘密手を這ふ蟻が嗅ぎつける〉の句、つまみ食いでもしたのだからか、ユーモラスな一句。〈星屑を混ぜてつくらん花水〉はロマンチック。〈肉桂水赤肴黄みな嘘つばち〉の句はニッ平水の本質を突いている。

すててこや消えぬ詛のいとほしく 江島 照美

意外な場所、思わぬ時にふとお国詛を耳にすることがある。したがって、「詛」を聞く句もよく目にする。それらの句の根底にあるのは掲句の「いとほしさ」であろう。なにも標準語にこだわらなくていいのだ。「すててこ」から、詛りの人の素朴な人柄が想像される。

〈蟬時雨思ひ出を売るフリマかな〉の句、フリーマーケット

に出されるのは、もう使わなくなった品。それを「思ひ出を売る」と表現している。売りに出した品物に対する愛着がそこに読み取れる。

〈浮世絵は今グラビアよ月下美人〉の句、浮世絵は今美術品だが、なるほど当時の庶民にとってはグラビアの美人を見る感じだったのだろう。「浮世絵」から「月下美人」への連想が作品の幅を広げている。

末枯の野より変身のカフカ来る

大塚李里子

カフカは実存主義の文学者。なぜ「末枯の野」なのか、どう変身したかは読者の想像にまかされている。

〈わが十字架背負ひて行くやこの炎暑〉の「十字架を背負う」、〈風と来て次の世に去る火焚鳥〉の「次の世に去る」、〈言霊の浮遊してをり世原〉の「言霊の浮遊」は作者でなければ言えない措辞であろう。ちなみに火焚鳥は鶉（ひたき）。雀くらの大きさで、黒い翼に大きな白い斑があることから紋付鳥ともいう。〈夏越の輪くぐりてゆらり宙へ出づ〉の句、確かに茅の輪の向こうには別の世界があるような気がする。

白桃をすすり生命線ぬらす

吉田 順子

「生命線ぬらす」がいい。通常、感情線や生命線を使ってもあまりよい句はできないが、掲句の生命線は成功している。白桃をすすって命が伸びた感じがする。

〈まかしさは風のみならず今年竹〉、〈凌霄花雲をとらへて宙に咲く〉、〈菩提樹の花に寄り来る羽音かな〉、〈わが余生急ぐな急かす秋の蟬〉の句、どの句からも作者の静かな心音が伝わってきて、安らぎを感じさせられる。

〈以下略〉